

PRIME インタビュー

軍国主義は、教科書でできたようなものじゃないですか。だから、ほんとに教科書の問題って、平和と直結してんですよ。



話し手：土志田栄子（元教員、平和運動）

聞き手：長谷部美佳（PRIME 所員）

坂井和佳奈（国際学研究科大学院生）（敬称略）

2023年8月28日、横浜市内のファミリーレストランでお話をお伺いした。ご本人のお話にもあるが、お生まれは戦前とのこと、若干足元などを懸念して指定の待ち合わせ場所に伺うと、すぐにでも教壇で授業ができそうなお若さで、土志田さんがおみえになった。退職からすでに20年経っているとは全く想像できなかった。退職後に教育現場が、どんどん悪い方に変わっていくこと、そしてそこに政治が持ち込まれることに大変心を痛めておられ、退職後20年後の今も現役で反対運動にかかわられ、街頭にお立ちになっているゆえの、お元気さだった。聞き手の小学校時代の恩師から「筋金入りだ」との紹介でお話を伺うことができたのだが、教科書の実物や、年表など様々な資料をご持参くださり、大変丁寧にお話を聞かせてくださった。そのほか横浜にある米軍基地反対運動など、最前線で若い人にも話しかけながら平和運動に携わっているとのこと、教育に関わる者として背筋の伸びる思いで、終始お話を伺った。

土志田さんの経歴

長谷部：土志田先生が、様々な平和教育をされたりとか、平和の運動をされてるという話を伺って、今日こういう形で、お時間を頂戴することになりました。M先生に相談したら、特に女性がいいかなというお話で、土志田先生のお名前を頂戴しました。M先生は私の小学校5、6年生の時の先生で、私たちが子供の頃なので、かなり特殊な教育スタイルをされていて。小学校の時に、それこそ夏になれば必ず原爆展に連れてかれるとかですね。あとは、東京大空襲の時も写真を見せたり、『オッベルとゾウ』という、戦争でなくなるゾウさんの話でしたでしょうね。それでゾウさんの絵を1枚つくったりとか活動をしている先生でユニークな先生でした。自分が小学校のときにそういう体験をしたので横浜市って、平和教育については、先生の裁量意見の部分があったんじゃないかと思うんですけど、そんなお話とかを聞かせていただければいいのかと思いつつ、また教科書の話をやってこられたということだったので、先生の現職時代、その、何かそういう平和に関わることをやっておられたのかとか、そういうことをちょっとお聞かせいただければと思います。

土志田：現在、教科書採択に関する活動をしてます。現職時代は、皆さんと一緒にしたからね。同じようにやってきましたけど。今日はどっちかといえば、教科書の話が中心になってしまうかもしれません。

長谷部：全然問題ないです。逆に、教科書の中の、現職の時でも構いません。私はM先生の、原爆展とか、やや教科書外の部分ですよ、（それを教わったのは）ちょうど1980年ぐらいの話なんですけど、土志田先生は、もうちょっと当然前から現職でしたよね。

土志田：そうですね、M先生は戦後生まれじゃないですか。私は昭和15年だから、ちょっと前ですね。

長谷部：そうすると、昭和15年ってことは、教員になられた頃が、昭和38年、オリンピックぐらいでしょうか？

土志田：そうですね、教員になったのは、昭和40年です。学校自体は、そんなに厳しい制約もなく、自由にできましたね。

現役時代からの変化

長谷部：今と比べると、ということですが、もちろん、教科書のその指導要領は多分当時からあるかと思うんですけども、それ以外の、裁量部分が多かったのでしょうか？

土志田：そうですね。教員の裁量でできることが多いから、結局、学級で色々やっても、校長が見に来て、これはダメ、あれはダメなんてこともないです。だから、自由に子どもたちを自宅に呼んで遊んだりとかね。子どもたち連れて、いろんなところに行ったりすることもできました。職員会議も、相当いろんな議論を自由にやりましたけど、今は全く違います。私は2001年の3月に退職しましたから、2001年あたりから、教育が徐々におかしくなりました。

長谷部：そうすると、昭和40年とか、1965年に先生におなりになっていて、小学校で、どうしても歴史の話というか、平和の話っていうのが出てくる。社会科にですかね。先生は全部（の教科書）お教えになると思うんですけど、特にこう、テーマとして、そういうものとか、国語とか社会とかの授業の中でやっていた感じですかね。

土志田：国語でも戦争を考える教材はずいぶんありましたね。『ちいちゃんのかげおくり』とかね、それから、1年生は『かわいそうな象』を読んだり。子どもたちに平和教育をしたいっていうことでは、教科書以外の教材を使ったり。

あの頃、『はだしのゲン』が出ました。『はだしのゲン』も学級に置いて、読んだりもしましたね。今はもう、『はだしのゲン』に対してバッシ

ングが大変ですから、学級にも置けないのでは。ユネスコの「教員の地位に関する勧告」（1966年）でも、「教員は、教員が最適と判断した教材を自由に子どもたちのために用意する資格がある」といっています。教えることの裁量は先生にあるということ。私はその通りの時代だったと思うんです、以前は。

長谷部：ところが今は、ほんとに違ってきちゃった。

土志田：私の定年間際の頃には、随分学校の様子も変わってきましたけど、それでもまだ踏ん張ってましたね。けれど、退職後、どんどん変わりました。そこら辺のところは、教科書に取り組むきっかけですね。

長谷部：現役時代と比べられて、いわゆるバッシングというか。でも、私の記憶だと、多分戦後50年頃（1995年ぐらい）までは、例えば、慰安婦の話も首相から談話が出たりとか、私の記憶が間違えてなければ、村山首相が誕生したりして。比較的、日本もいわゆる「自国の加害」に向き合っていこうとかという空気が出ていたりとか。被害の話っていうのは原爆はじめ、東京大空襲をはじめ小学校の頃からずっと教わっていたんですが、なかなか加害の話は習ってこなかったイメージがあります。変わっていったような印象がある。90年代中ごろに変わっていった印象があります。その時は、まだ自由でしたでしょうか？

土志田：そのころはまだそんなに締め付けはなかったですね。副校長になり、校長になっていくという昇進のための評価制度なんかも入ってきたり、教員評価制度なんかも入ってきて。やっぱり、いい評価をもらわないと、上に行かれないということもあったでしょうから、そういう意味では、教員も教える内容とかに変化はありましたね。それから、文科省や県の教育委員会なんかに睨まれないように気を遣う先生たちも、一部出てきました。でも、まだ80年代、90年代くらいはよかったと思います。1996年、ここからなんですよ、歴史教育が変わったのは。この年、「新しい

歴史教科書をつくる会（略称「つくる会」）が結成されました。私たちは戦争の被害だけでなく、努めて加害の事実を伝えようとしてきました。それを「自虐史観」と決めつけてきた。そうした取り組みを「自虐史観」といってバッシングしてきた。日本会議などの右翼的な団体が、盛んにこの自虐史観をなんとかしなくてはいかんっていうことで、国を挙げてやってきたわけです。そんな中で、やっぱり私たちの平和教育も、それから戦争加害を教えることも、少しずつ少しずつ後退させられたと思うんです。

｜ 作る会の登場

土志田：1996年に「新しい歴史教科書を作る会」が全国で結成され、翌年の1997年に神奈川県で「新しい歴史教科書をつくる会」の地方組織が結成されました。全国ではじめての結成です。だから、神奈川っていうのは全国に先駆けて、歴史教育をゆがめたんです。「つくる会」系とよく私たちは言うんですが、自虐史観はいけないというその考え方や、日本会議の動きは盛んで、脈々としたその土壌が神奈川にある。私は歴史教育への偏向は、神奈川がスタートだったと思うんです。それで、苦しい戦いがずっと教科書採択で行われたのだと思います。

長谷部：私の印象だと、神奈川県は基本的には先進県というイメージでした。飛鳥田市長がいましたし、県にはずっと長洲さんがいらしたり。私は先ほど申し上げたように、外国ルーツの方の話（研究）もするので、長洲知事もあって、民際外交があったり。外交だけではなくて、日本の中にいる、例えば在日朝鮮人の話なんかも割とこう早い時期・時代から県が取り組んできたという印象があります。一方で、それが反転してしまう速さは同時に速かったのかと。何が違うんだろうと。長洲さん、飛鳥田さんみたいな、いわゆる都市の知識層が政治を動かすみたいな事情があるのかと

思いきや、あつという間に反転してしまうとか。
土志田：私は1962年に大学を卒業してすぐ教員になれなかったんですね。ちょうど60年安保闘争の世代ですから。その関係で就職差別があり、学生運動をやった学生たちは就職できなかった。私はどうしても教員になりたかった。その時にちょうど、社共統一市長として当選した飛鳥田一雄さんが脚光を浴びて登場したんですね。何とか教員試験を受けなおし、1965年、やっと教員になりました。飛鳥田さんは確かにいい市政をしていたと思います。でも2期目あたりから、やっぱり少しずつ違ってきた。自民党系の強い力、財界など、大きな力が働いたんじゃないかと思いますけどね。

中田市長の登場

長谷部：結局、擦り寄るって言ったら変ですけど、地の力とうまくやっついていかない限り、やっぱり市政を運営できないということですかね。

土志田：そうですね。飛鳥田市政が終わって、そのあと、細郷市長、高秀市長と続きました。その中には、飛鳥田市長の踏襲というよりも、自民党筋の市長もいましたけど、一番の問題は2002年に登場した中田市長だったんですね。中田市長は、「新しい歴史教科書を作る会」の教科書を横浜に入れるという意図があって市長になったと思うんですが、それで教育委員を次々と変えていきました。私は、中田市長の前の高秀市長の時も教育委員会をずっと傍聴してましたけど、非常に穏やかに、賛成も反対もなく、全員の合意で進んでいました。けれども、中田市長が当選したその2002年あたりから教育委員会がどんどん変わりました。

教育委員は市長が任命できるんです。市議会で承認は得ますけどね。だから、例えばこういう教科書を横浜に入れたい、あるいは自虐史観の教科書はいかんという「つくる会」の意向を汲んだ市政にしようと思うと、まず教育委員を変えなきゃできないわけです。横浜市の教育委員会は、6人

の構成で、任期は4年です。そこで中田市長は教育委員を、任期が来るたびに次々替えていきました。

その替え方はすごかったですよ。まず文科省から、文科省企画官を教育委員に連れてきました。東京都の教育委員会からも一人。そういう外部から大物2人を連れてきた。それから、義家弘介さんも入れました。義家さんは、国会議員になる前で北海道余市高校を辞めた経緯は知ってましたが、中田市長に言い含められていたんですね。そして、教員出身でとてもいい委員だった2人を辞めさせ、意に沿う委員を任命していきました。

一番大変だったのは、Iさんという教育委員でした。このIさんが、横浜の教育の一番のガンだったんです。横浜の教育委員会をめちゃめちゃにしていきました。今もIさんの残していった悪しき前例が踏襲され、開かれた教育委員会とは言えないですね。Iさんは2003年、中田市長の口利きで教育委員になりました。それ以来、このIさんは17年在任してました。この人はもともと市の総務局長を3月で退職して、4月に教育委員会に滑り込んだ人物です。総務局長っていうと、市役所の中では睨みを利かすポストですからね、やっぱりすごく君臨していました。

こうやって中田市長が教育委員をどんどん任命・配置換えをしていったことが、一番大変でしたね。私たちにとっては厳しい状況でした。今日は教科書も持ってきたんですが、2011年、2015年と続けて採択されてしまった育鵬社の歴史と公民の教科書です。こちらは2020年に採択され、横浜市が現在使ってる帝国書院の歴史と東京書籍の公民教科書です。育鵬社の教科書は、他の教科書と全く違います。自衛隊については9条に違反しないという政府見解を本文に載せ、憲法学習では、憲法は絶対不変ではないと憲法改正の表題を作り、それに2ページも割くなど、異常です。他の教科書にはないんですよ。日本国憲法の扱いも随分違いますね。育鵬社の記述では「憲法を絶対のものと考えてしまうと、時代とともに変化する

現実問題の有効な対応ができない」と。憲法改正の方向に導こうとしているとしか思えない。でも教師は「教科書を教えるんじゃないで、教科書で教える」、つまり、教科書を丸ごと教えるのではなく、教科書を使って多角的に考えさせるのだと。だから、横浜の先生方は、これが出た当初、2015年ぐらいまでは抵抗して、資料集を作ったりして、この通り教えてる先生は少なかった。でも最近はサラリーマン化したっていうとよくないけれど、結局時間もないから、手っ取り早く教科書にあることを教えちゃう。だから教科書っていうのは怖いと思います。育鵬社の歴史教科書には、戦争を賛美するような表現があちこちに入っています。さっきお話しした教育委員のIさんが、就任2年目の2005年教科書採択の時、教育委員会の会議の席で、約10分間東郷平八郎の日本海海戦は見事な戦いだっ、ロマンだ、日本の夜明けはここがスタートなんだと、滔々とやって大変でした。教科書採択をこういう政治的にしちゃいけないの。そこを言いたいです。

太平洋戦争を学ぶ際、大東亜共栄圏くらいは使うけれども、太平洋戦争の表題の下にわざわざ大東亜戦争を書き入れて目立たせたり、先の戦争は自存自衛の戦争であると戦争肯定してますよ。これではすり込まれちゃいます。

他の教科書ではアジアへの侵略とか、南京虐殺があったことなどちゃんと記述しています。しかし、昨今、残念ですがどの教科書も検定を意識して「つくる会」を刺戟するような表現は使わなくなってきてます。

育鵬社には、植民地って言葉は出てくるけど、「植民地支配」の中身はないですね。むしろアジアを植民地支配していたのは、欧米なんだと。そこへ日本が行って欧米諸国からアジアを解放したんだっていう、そういう論点になっています。

日露戦争でいうと大体の教科書は与謝野晶子を入れるんです。「君死に給うことなかれ」を。育鵬社にはこれも出てきません。これまで築き上げてきた教科書の常識を全く壊して、歴史を修正し

ようという特別な思想を持った教科書として登場したわけです。

だからまともに審議している教育委員会は選ばないわけですよ、あまりにひどいから。2011年の育鵬社教科書採択は全国で4パーセントぐらいのシェアしかないんですから。その4パーセントの半分以上を横浜市が採択した。全国的には中高一貫校とか私学、一部の、生徒数のごく少数の市町、そういうとこだけでした。このように全国的に採るところが少ないんですが、横浜市は大きいですからね。学校も多いし、生徒数も多いから「つくる会」系も必死ですよ。だから、手が込んだやり方してるんですね。

2009年の時までは、18区それぞれが採択地区になっていて、区ごとに教科書を採択していたんです。例えば、金沢区は小学校の社会科では、海が近いから海の教材がいいとか、緑区とかは、東京に近いからそんな要素があったほうがいいとか、区ごとの地域性を生かした教科書採択だったんです。

それが、2010年に中田市長とIさんと結託して、18採択地区を全市1つの採択地区にしちゃった。区ごとに「つくる会」系の教科書採択を狙うより、1採択地区なら横浜市丸ごと「つくる会」系にできる、こんないい話はない。つまり、「つくる会」は、自由社、育鵬社教科書を中学校に採択させるために、採択地区の変更を求める請願を出して、教育委員会で可決させたんです。

前後しますが、育鵬社が採択される前の2009年の教科書採択で、横浜市は自由社という「つくる会」の教科書を採択しました。この2009年が、横浜市の最悪の教科書採択の始まりでした。その時は、まだ18採択地区でしたが、18区中8区で自由社を採択しました。しかも、6人中5人の教育委員が答申を全く無視して選んだんです。この時です。Iさんが「採決は無記名投票で」と発言し、何の異論もなく決まっちゃった。教科書を教育委員が選ぶにあたっては教科書審議会の答申を受けるんですが、その答申では、自由社の評価は0

評価だったのに採択しちゃった。答申無視の無理やりの「つくる会」教科書の横浜デビューだったんです。そこから熾烈な教科書採択の闘いが始まったんです。

長谷部：そういうことは、市議会などで問題になったりしなかったんですか？

土志田：議会は教育への政治介入をしてはいけないうことで、極力避けてはいました。しかし、2012年ですね、「わかるヨコハマ」っていう中学生が使っている副読本に、関東大震災で起きた朝鮮人の虐殺を明記したものがあったんです。その虐殺という表現を直せということで、右翼団体から請願がいっぱい教育委員会や市議会に出た。ああいう市議会や教育委員会の構成ですから、その請願が通っちゃうんですね。しかも、その「わかるヨコハマ」を全部回収しろと。その後の版には虐殺を殺害に表現を変えろとか、慰霊の碑の写真を削除しろとかそういう風にさせました。それで、問題の2012年度版は、すでに生徒に渡しちゃったものを全部回収させて、溶解処分に。溶かすんですね、教科書を。今はどこにもないですね。その時の教育長は、横浜市議会で追及されました。「なぜそんな副読本を回収しないんだ」という追及は厳しかった。

長谷部：なぜ回収しないのか、という追及ということですか？

土志田：そう。激しい追及に、教育長は「はい、回収いたします」と答えてしまう。この時の市会を傍聴していましたが、なさげなくて、泣きたくなっちゃいましたよ。それで、その教育長は処分になり、たまたま退職しましたね。本当に横浜市の教科書をめぐる政治関与は、他に類を見ないですね。ひどいです。

もう一つ大変なのは、やっぱり先生方でした。少しでもいい教育をしたい、特に平和教育の問題には取り組みたいって、先生方にはそういう思いがあります。2009年に自由社が採択された時、横浜市教職員組合は資料集を作ったんですね。自分たちはちゃんと平和のことや今までの歴史を、

普通の教科書通りに教えようということで資料集を作った。その資料集が、市会で自民党議員にたたかれた。教育委員会で採択決定したものに、反対するような資料集の使用はけしからんと。市議会で教育委員会が散々たたかれた。以来、組合の様々な活動への制限が厳しくなっていました。

「つくる会」系は請願などを、個人名で出します。でも個人名でも中身を見ると「つくる会」とわかります。市内にも県内にもいますね。日本会議の大本のところから各県の支部に通知がいて、各市の教育委員会に一斉に同じ文の請願書を出すんだと思います。

長谷部：組織力があるんですね。

土志田：本当はあんまりないんだけど、やっぱり威力妨害的な威力だけはあるんじゃないですかね。

長谷部：今聞いてると、在特会のやり方と似ている。嫌がらせをするという。今は請願とし、要はクレームをする。それで多分、その行政の担当者が参って、通しちゃう。

土志田：嫌がらせ的な匂いは消してあり、正規の請願・陳情という形をとって威圧するわけですよ。私たちがそうした陳情があったときは対抗陳情を出すんですよ。結局、いつも彼らの請願だけは通って、こっちが否決ってことになる。

長谷部：それはやっぱり、その議会の構成の問題なのではないですか？

土志田：構成ですね。その後、中田市長は2009年で退任して、林市長が3期務めました。林市長は中田市長ほど露骨じゃなかったけれど本質は変わらない。

中田市長時代、教育委員だった元校長先生にお会いした時に言ってたんですけど、中田市長に会ったら、育鵬社の教科書を見せられて「どう思う、この教科書。いいと思ってるんだけど、先生どうですか」と聞かれた。その先生はバラバラと、中身を深く見ないでね、「まあいいんじゃないですか」って言った。即、教育委員に任命され、入ってみたら自分以外はみんな「つくる会」系教科書支持の人だった。その校長先生は1期4年で退任

させられました。市長が教育委員を任命できるという制度は、そもそもこういうことなんですよね。今もそう、ずっとそうです。

長谷部：ひっくり返すというか、元に戻すことはできないんですか。つまり、元のあり方というか、もとは市長の任命じゃなかったんですよね？

土志田：かつては、教育委員は公選制でしたが、1956年廃止されました。今、公選制の可能性はゼロですね。国の検定制であるでしょ。国の検定制委員だって文科大臣の任命です。学術会議で気に入らなければ任命しないのと同じ。だから、政治が教育に介入しちゃいけないとなっても、ぴったり介入という事では国も自治体も重なっている。

教科書のもつ力

土志田：私たちも教科書にこだわるけど、権力もこだわる。なぜかという、やっぱり教科書って子どもに一番近いんですね。

教科書は知らないうちに読むんですよ。知らないうちに覚えさせちゃうわけ。戦前も教育勅語をぜんぶ覚えさせたりした。だから、すり込むという点では、教科書は侮れない。

長谷部：私が、M先生が何したかを未だに覚えているのと同じですね。40年前のこと覚えてますからね。

土志田：そうですね。教育はそれくらい、子どもに残る仕事ということでしょうね。憲法を教え、民主教育をすすめるという教育に対して、「つくる会」は権力と一体になって自虐史観を否定し、日本の文化、伝統、愛国心を再び子供たちに取り戻すという狙いがある、教育委員を変え、手を変え品を変えて色々策略をしている。だから、なかなか覆すのは大変。それでいて、育鵬社のような教科書は現場の先生もいいと思ってないんですよ。それでも選ばせてもらえないからどうしようもない。教科書採択にあたって答申を出す

審議会委員は教員ではないので、教員に教科書を調査させるんです。この選ばれた教員が教科書調査員として調べるわけですよ。

調査にあたっては、調査観点を作り、観点到合うとか合わないとか、調査するんですけど、教育委員会はこの評価観点まで都合いいように変えてしまった。社会科でいえば一番大事な観点と思われる「社会的事象を的確に把握し、思考し表現する能力を育むものであること、民主主義に関する理解を深める、情報を収集し活用整理する能力を育む」などの観点が、全く削除されてしまった。かわりに、教育基本法や、学習指導要領に適しているか、横浜教育ビジョンや基本計画に適しているか、そういう特色となっているかというのが観点になってしまった。するとみんな観点到合ってるんですよ。だから、育鵬社にバツテンをつけられない。結果、育鵬社のような特殊な教科書も高得点を付けられてしまう。教科書採択の問題は巧妙ですね。大変です。

活動のきっかけ

長谷部：退職してから活動をされてますよね。定期的にこれはまずいというのがあったと思いますが、それを活動として続けていこうと思うきっかけが何かあったのでしょうか？

土志田：教育委員会がこんなふうに1人の市長の任命でどんどん変えられていくことに疑問を持ちました。日露戦争を夢やロマンと語る教育委員が子供たちの教科書を決めていいのかって思いましたね。私が退職した2001年、神奈川県は通達を出した。教科書採択に当たっては教員の意見は聞かないようにという決定の通知でした。つまり学校票を廃止しちゃったんです。

学校票は、先生方が教科書を1冊ずつ調べてね、うちの学校の子どもたちには、これが一番向いてそうだなって判断して、希望の出版社を決め学校票に書くわけです。それを参考にして採択してた

んです。その学校票を廃止しちゃった。その時の文科省通知の文言にちゃんと書いてあるんですよ。「先生がいいからと言って安易に選ぶようなことをしてはならない」って。県はすぐそれを受けて、各市町村に通知した。横浜市は県の通知を、即実施に移したっていうわけです。2001年「つくる会」が扶桑社から教科書を発行したのはその年でしたよ。「つくる会」が一番最初に出版したのが扶桑社。しかし、扶桑社はその後撤退。次が自由社。いまは育鵬社が出版され、2社あります。

2015年時の育鵬社はこれまでで一番シェアが高く、歴史が全国で7万2000冊。全国で6.2パーセントシェアになったんです。だけど横浜が2万7000冊、それから大阪が1万8000冊なので、これだけでも3、4万冊くらいでしょ。残りは元々ある小中一貫、中高一貫校とか、そういうところ。如何に横浜での採択が功を奏したか。1採択地区に決めたっていうことも、彼らの狙い通りです。まあ、そういう変遷がずっとあったんです。

抵抗の方法

長谷部：それに対して、先生方側は対抗してきたと思います。具体的にはどういうことを？

土志田：2010年に、私たちは横浜教科書採択連絡会を結成し、市内18区に教科書問題を考える会を作ったんです。それで、一斉に、こんな歴史教科書や公民教科書を子どもたちに渡しちゃダメ、当たり前前の普通の教科書に戻そうと活動をしました。街頭でチラシをまいたり、各区で学習会したり、市全体で学習会を開いたり。署名も11万5000筆くらい集めましたね。弁護士の人たちも、育鵬社の公民教科書は憲法のところの書きぶりがあまりにおかしい、立憲主義って言葉は書いてあっても、結局権力を抑えるものとは読み取れない、憲法は国民の義務、守るべき規則になっている、立憲主義についてきちっと書いてないと。平

和主義についても、自衛についての記述や自衛隊についての説明はおかしいと。国民主権もね、何者にも侵されない自由権とか、そういう憲法の精神がきちっと書かれていないっていうことで、弁護士関係の団体も、意見書を出してくれました。歴史学者の先生方も出してくれましたね。横浜市内に住んでいたり、お勤めしてる大学の先生方や有識者ら670人の共同アピールっていうのも出しました。

ありとあらゆるできる限りのことをして、2015年は臨んだんです。でも、ダメだったんですね。

政治関心の低さという問題

長谷部：結局は政治の問題かなと思います。投票率は低いし、こういうことをやっている人たちが国を動かしてきちゃうんですよ。その危機感がない。

投票率なんてたかだか5割くらいですよ。自民党は要は2割だけで、全人口の2割だけで当選してる。別に国民を代表してるわけじゃないけど、選挙で勝てば勝ちましたって言うわけですから。

土志田：その選挙もね、小選挙区制でしょう。あれがやっぱり一番問題ですよ。特に横浜の場合はね、市議、県議選挙も小選挙区なので小規模の区などは2名選出なんて言う区もある。定数が少ないと自民党が入りやすい。

投票してもなかなか声が生かされないという実態があるから選挙に行かない。

何から手をつけていいかわからないぐらい、権力の思うままにずっとなってきた、そして無関心がどんどん増えている。「核だって持ってもいいんじゃないの、そろそろ北朝鮮も怖いしね」「やられたらどうすんだ、ミサイルもバンバン打ってるじゃん」という世論もかなりある。やっぱりマスコミに流されていく。

長谷部：北朝鮮のミサイルなんて…と私は思うん

ですけどね。ウクライナの話もそうですけど、米韓が北朝鮮の喉元で演習すりゃ、そりゃミサイル打ちたくなるでしょうし、でもそういうことは一切言わない。言えない。

土志田：本当にそうですね。日本も技術では失敗ばかりしてるじゃないですか。決して一流国じゃない。三流国。後進国です。ジェンダー平等や食料自給率、人権侵害、差別などいろいろな面で、もうはるかに後進国ですよ。

長谷部：もう人口にしても知能にしても勝てない。中国の人口のうち5パーセント頭がいい人がいたら、その数は日本の人口と同じくらいになるわけですよ。日本の人口より多い人が優秀なんですよ。中国では。そしたら仲良くしようっていうしかないと思うんですよ。

土志田：そうですね。憲法9条を持つ国です。戦争への道を進むのではなく、話し合いで平和を築く道に進めなくてはならないと思います。そこに希望を持たなきゃいけない。昨日もね、ノース・ドック反対の署名行動に行ってたんですけど、若い人に「ノース・ドックって知ってる？」って聞くと「知らない」と。「横浜みなとみらいの横の、瑞穂埠頭に米軍の基地があるのよ。そこに軍備を配備して色々戦争の準備が始まっているの、戦争になって日本が巻き込まれたら、あなたたちも行くことになっちゃうかもしれない」と話した。「そんなこと。ありえないじゃん」と。「いや、ありえないことがどんどん今進んでるんだよ。ともかくこれ読んで」ってチラシを渡したんですが。

もう話すしかないなと思ってます。話しかけても話せる人なんか何人もいないわけじゃないけれど。1人1人話しかけて、チラシ読んでって渡して。地道な、蟻が象を突いてるような運動に見えるけれど、権力者らの発想は教科書で子供たちの頭を洗脳しようって発想ですから地道にやるしかない。だけど、やっぱり戦後の民主主義とか、憲法9条は脈々と息づいてると、私は思います。

教科書問題に対する戦いの変遷

土志田：始まりは2009年の自由社歴史教科書の採択でした。6人の教育委員のうちの5人の委員が自由社採択に賛成した。反対は1人だったんですよ。次の採択年の2011年には、自由社と同系列の育鵬社の歴史、公民両方とも採択されてしまった。4対2でした。2人良心的な人がいたということ。前の異常な採択を見て、良識的に判断した委員が1人増えたという事でしょう。問題の委員のIさんはこの年留任7年目。それでも4対2までいったの。ここに至るまで、私たちは必死に運動しました。それでも育鵬社採択になってしまった。自由社に続けて育鵬社採択、それは衝撃でした。ここまでやっても、教育委員を替えない限り、ダメなんだと。

2015年、3回目の中学校の教科書採択の時でした。結果はまたもや育鵬社採択。結果は3対3でした。3対3と半分まで来たんです。良心的な教育委員が半分までになったということ。私たちは会場でじっと聞いてました。問題は無記名投票なんです。県内で無記名投票を実施しているところは横浜くらいで、あんまりないんですよ。その無記名投票の理由が何かって言うと、教育委員には教科書採択の判断と責任があるからと。でも、判断するのは実際に使う教員であるべきです。教育委員がつまらない思い出話や、持論を滔々としゃべるのはおかしいですよ。それで選ばれるのがなんで育鵬社なんだと。

もう1つの理由は、静謐な環境で採択するためというわけ。手を挙げて、誰が育鵬社を採択したかわからないようにするためでしょう。結局私たちみたいな者が突っかかってくるからという事でしょう。3対3の同数まで持ち込みながら育鵬社に、決定してしまったのはなぜか。それが教育長だったんです。教育長が採決後、即、「私の判断で育鵬社に決めます」と発言。もう、驚きと怒りで傍聴席も騒然としました。実は2014年教育委

員会制度が変わり、教育長に絶大な権限が与えられるようになった。当時の岡田優子教育長は「私の判断で育鵬社にします」って言って、育鵬社になってしまった。育鵬社に入れた3人は大体わかります。もちろんIさんを含む3人です。

次の採択は2020年でした。教科書採択は4年ごとなんですけれど、指導要領が変わったり、新しく検定を受けた教科書が参入したりするとずれるんですね。この2020年の採択で、やっと念願かなって「つくる会」系の教科書、育鵬社を不採択にしたんです。結果は2対4で。ちなみにIさんは15年在任して2018年やっと退任してますので、Iさんの意向をくんだ委員が2人残っているという事です。これだけ頑張ってもまだ「つくる会」系の教科書に賛同した人が2人いるんです。この2人の委員は今もいます。来年がいよいよ中学校の採択です。この2人が変な働きをしないか見張っていかなくてはならないんです。

長谷部：誰が作る会系か分かるんですか？

土志田：たとえ無記名投票でも、育鵬社支持の委員は発言の中でわかります。1人は教育長です。林市長任命の教育長ですからね。この教育長は2024年3月に任期が切れますから、2024年の中学校教科書採択の時にどういう教育長を今の山中市長が選任するかですね。もう一人は来年も残留しています。

長谷部：ロビイングをするしかないんでしょうか。するとしたら、具体的に何をしますか？

土志田：なかなか難しいですけどね。でも、行政一筋の教育長ではなく、教育に関心や識見のある教育長を選任してほしいという要望書は提出する予定です。平和を考えるとか平和教育とか、平和についての運動って色々あるけど、私の切り口はやっぱり教科書で、教科書が昔のように国定教科書にさせられて、戦前のようになっていく。そういう時代を呼び戻してはいけないと、そういう思いですね。

現役世代は教科書を吟味できない

長谷部：今の現役若い先生たちもそういう活動に参加されたりするんでしょうか？

土志田：してないですね。本当に忙しいのと、死にそうなくらい大変なんですよ。

私たちは区役所で開かれる教科書展示会に見に行って、教科書についての意見をアンケートに書いて出します。でも、現場の教員たちは見に行けないんですよ、忙しくて。それに教員の意見が採択に生かされる仕組みがないんですから、教科書に対して関心が薄くなるのは当然ですよ。先生たちは教科書を見ないで、4月に突然、はい、この教科書ですと渡される。おかしいですよ。

私の現職時代は、学校に一定期間、教科書見本が回ってきて、みんなで教科ごとに教科書を見て話し合ってた。各学校回るなんてことは横浜ではできない。1採択地区になってしまったので活用できる見本の冊数が極端に少ないんです。F市などでは、採択地区が1つであっても、学校数が少ないから学校持ち回りで展示会兼研究会が出来ている。小さい市はそういうことができるのね。横浜は日本一巨大な採択地区ですから何事も難しい。

長谷部：それは全部、文科省の問題ですか？

土志田：文科省は、先生の意見を聞くとは言えません。だから学校票が生かされている所もあります。学校意見を出して、採択の参考資料になっている地区もあります。文科省も正面からそれをけしからんとは言えないはず。横浜市なんかそれを逆に奪っちゃったんですけどね。

歴史を知らない学生、教えない学校

長谷部：大学にいと、日本の歴史を十分に理解していない学生がいるんですよ。実際には、知らないのか答えるのがいやなのかわからないん

ですけど。「日本はどこを植民地にしたか知ってる？」って言っても、誰も言えないわけです。

最近では近隣地域の学生が多いように感じるのですが、そうすると横浜から来てる子たちはこれ知らないのかなって心配になるのです。場合によっては留学生の中国人の子の方が日本の歴史をよく知っているんです。

土志田：それは受験制度にも関係してくると思うんですけど、高校の受験が2月でしょう。そうすると、近現代史まで進まない。全然そこまで行かない。その頃はもう受験勉強一色だから。その後ちょこっとやったって、みんな受かった落ちたで、頭にも入らないし。私は、公民だったら憲法から始めればいいし、歴史は近現代史から教えればいいと思います。だから学校にも責任があるし、教員の側にも責任がありますよ。教えてないんだから。私は、ともかくすっ飛ばしてでも近現代史を教えました。縄文時代とかも、そこから今に結びつけて、文化とかね、生活様式とか、今の日本人が作られてきた骨格みたいなもの教えた。でも近現代史は学校でしっかり教えなくてはだめですね。

実は、高等学校の教育っていうのは比較的自由だったんです。高校の教科書採択は毎年なんです。高校は、学校ごとに好きな教科書を選んでいいんです。学生のレベルに合う教科書を選べます。

ところが、実教出版問題っていうのが起きたんです。2012年です。実教出版の日本史教科書の「君が代や日の丸を行政が強制したようなところもある」という記述に、「つくる会」系がかみついて、この教科書はとんでもないと。

すると横浜市教育委員会はなんと、市立高校7校が申請した実教出版の『日本史』を山川出版に書き換えて答申を出しちゃった。そんな馬鹿なことを平気でやったんです。

私たちは、その時教育委員会を傍聴していましたが、うちが出したのと違うと高校の先生が言うんです。今までは高校が申請すれば大体通ってた

んですよ。それは変だっけ言うんで、情報公開をとったら、学校からの希望票にはちゃんと実教出版って書いてあった。教育委員会事務局が勝手に書き換えた。教科書攻撃がついに高校にまで来たと、驚きました。

| 検定基準改訂

土志田：2014年に、検定基準の改定がありました。未確定な事象、例えば南京大虐殺とかね。虐殺は無かったと主張してる学者もいるわけで、つまり未確定な事象だというわけです。また、先の戦争の被害者の数は中国では何十万って言ってるけど、そこも未確定なところがある。そういう未確定なことは、特定の事柄を強調しすぎてはいけない、それから通説的見解がない数字などについては「通説的見解がない」ということを明示し、生徒が誤解しないように書けて。

回りくどい言い方してるけれど、決まってないことは書くなということですね。書くなに対して、閣議決定されたことは書け、政府見解も書け。最高裁の判例がある場合は、判例に基づいた記述をすること。だから、あの集団的自衛権についても政府見解が書かれるようになりました。こうなると教科書会社も検定を意識して記述が消極的になる。政府見解以上のことは書かない。両論併記さえ書き渋るようになる。普通と言われる教科書も、どんどん右傾化していると思います。

軍国主義は、教科書でできたようなものじゃないですか。だから、ほんとに教科書の問題って、平和と直結してんですよ。私たちの取り組みは一生終わらないねって、死ぬまでやらなきゃねって言ってます。

| 教科書以外の平和活動

長谷部：今後の展望を教えてください。ノー

ス・ドックでチラシを配られているという話がありましたけど、結構頻繁にいらしているんですか？

土志田：そうですね。ノース・ドック問題が出てきて、今、アメリカ軍の揚陸艇が駐留してるでしょ。ノース・ドックと言えば、1972年ベトナム戦争の時、戦車闘争っていうのがあったんですよ。ベトナムからきた米軍の戦車をノース・ドックから相模原へ修理のために運び出す。その時に、市民はノース・ドック前でその戦車を止める戦いをしたの。今もノース・ドックは米軍に接収されたままなので、早く返還しろっていうことは、横浜市も言ってきた。でも、その早期返還要求にも関わらず、新たに配備すると。それで、いま私たちも注目して、ノース・ドック反対のビラを配ったりしている。横浜港は、山下公園もあって、いい港でしょ。市民の大切な場所なんです。だからこの運動はやっぱり大事だと思う。多くの人が横浜港に米軍基地があるなんて知らない、そこが問題ですね。

長谷部：そういう団体を作られたのですか？

土志田：あちこちに実行委員会が出来てます。それから、戦争展をやったり、原爆展をやったりしてます。広島に原爆が落とされた8月6日、長崎に落とされた8月9日の両日にね、チラシを配ったり、署名運動してね、核兵器廃絶を訴えています。それは今、全市、いえ全国でやっています。

今は9条の会が各地域に何千ってある。私たちも磯子区の小さな森町で9条の会を作ったの。6日と9の日に宣伝したりしてね。安保法制が通った3日に毎月やっているとありますね。平和につながる運動は一生やっていくんだと思う。少し疲れてきたけど。

でもね、面白いの。中高生などにちょっとって声かけて、「憲法9条って読んだことある？」って聞くの。「その9条を変えようって動きもあるんだよ」って話したりね。結構会話になるの。面白いですよ。だから若い子に話しかけるって大事なことだなと思うの。

長谷部：そういう活動もやられてるんですね。

土志田さんが受けた差別

土志田：私は60年安保闘争世代。就職差別を受けて、教員試験を何度受けても不合格。2年後に教員になることが出来たんですが、教員になってからが大変だった。すぐに横浜教職員組合（浜教組）に入ったんですが、組合からは睨まれた。選挙で特定の政党を支持しろという方針に反対したためだった。浜教組の中で、新任から政党支持の自由を主張し続けるのは、それは勇気のいることだった。主張を訴えようと組合の役員にも立候補したが、受からなくて。組合役員選挙が一番きつかった。政党支持を言えばアカ攻撃に遭う。

こんなこともありました。組合役員に立候補して自分のポスターを貼るじゃない。同じ職場の組合役員が剥がすのよ。抗議すると、うちの分会の名前を使うな、あんたは認めてないって言って。そういう世界。それでね、土曜日のお昼なんかね、いつものように、食事に行きましようって誘うと、組合選挙近くなると断るのね、ちょっと今日は行かれないと言って断る。仕方なく一人でいつもの店に行くとね、奥にみんないるんです。

それから、どっか旅行行ってきても、なんか、私のとこだけはないんです。お土産とか。それからこんなことも。若い人に本を貸してほしいって言われて貸すでしょ。翌日、もうその本を返しに来る。早いねというと「先生、いいです、ありがとうございます」としか言わないのよ。だから、土志田からは借りるなってことなんじゃないの。

なにしろ、すごかったですね。お休みした時なんか、副校長が教室に来てね、「お前たちの先生はどうだ」って子どもに聞くの。生徒が「いい先生ですよ」というと、どういう教え方してるかノート見せろとか言ってるんですって。

出勤して子どもがそれを話してくれた。直ぐ副校長のところに行って何でそんなことを聞くのか

抗議すると、「父兄がみんな先生の教え方を疑ってる、だから、ちょっと注意しようと思って」って言うんです。「みんなってどなたですか？」と聞いても、「みんなはみんなて特定はできない」っていうから、「じゃあ、今から年休を取らせてください、家庭訪問させていただきます」といってね。家庭訪問したの。そして何軒か回って「何言ってるの、先生を信頼してるから」って言われて帰ってきて、「そんなことなかったですよ」って言ったら、副校長は黙ってた。

当時はそういう嫌がらせが普通だった。あの当時の職場での差別は思い出しても胸が熱くなる。その時は私にも子どもがいたから大変だった。2人目を産む時もね、育休を取る先生をうちのクラスの担任にしてくれるなって、そういう運動もされた。2年目の持ち上がりの学年だったので、生徒たちから「先生持ち上がって」という声もあって、学校としてはやむなく持ち上がりの担任にした。ほんとに毎日大変でした。60年代後半から70年にかけて、校長からは睨まれ、同僚の一部や組合の役員からは陰湿な差別を受け、大変な教員生活のスタートでした。

70年代後半に入ると小学校も学級崩壊が始まった。中学校も荒れていた。朝登校するとまず、校庭のたばこの吸い殻集め、窓には卵やうどん等投げ付けられた跡があり掃除をする。隣接の〇中学校の生徒だったのでしょね。でも、その時の小学校の校長先生がえらかった。「これを決して対岸の火とみてはいけない。わがこととして向き合っていこう」といったんです。いい校長先生だと思いました。そんな中、〇中学校で、女子中学生が飛び降り自殺した事件があったんです。中学校は非行のピークでしたね。勤めていた小学校も学級崩壊が始まっていたので、学級がどうにもならなくなると担任も務められない。そうになると、校長から、代わりに担任になってくれと言われる。特に、1年きりの6年生を担当するということは大変だった。何回かそういう役目をやって来た。組合からは睨まれていたけれど、教育実践

では文句を言われることがなかったから、発言権というんですか、だんだんつけていきましたね。

組合の役員立候補は80年90年代も続いたんですが、ついに当選することはありませんでした。言うべきことは言う、やるべきことはやる、かなり強がっていたかもしれない。でも、夢中だった。ある校長に巡り合った時に、「あんたのあっちの方、やめられないのかね」といわれました。つまり、特定政党支持反対とか組合役員立候補とかやめられないのかねということですね。「それやめてくれたら、俺は、副校長に君を推薦したい」と言われた。「先生、本当に申し訳ないけどやめられません。」と答えました。それくらい大変な時代でしたが、精いっぱい教員時代を全うしたと自分では思います。教師を退職後、教育現場がどんどん変わっていくのを見て、大変なことだと胸が痛みます。先生も大変、子どもたちも大変。学校はもっとシンプルに、先生と子どもが自由でのびのび過ごせる場であるべきだと思います。効率化、省力化、データ化、合理化等といったものは、学校に馴染まないはず。子どもはゆっくり育つもの、自分で生きる力をつけていくものです。子どもはみんな違うのですから。その違いこそが尊く、楽しみであり、希望なのだと思います。

インタビューを終えて（坂井和佳奈）

教科書問題は、以前から関心の高いトピックであった。平和教育の研究をしていることも大きな理由の一つだが、家族に教員が多いことも「歴史をどう教えるのか」という問題を身近に感じている要因だろう。

土志田さんのお話を聞く中でまず感じたのは、「新しい教科書をつくる会」の周到さである。議会や教育委員会の構成メンバーを変え、請願や陳情という形をとって自分たちの主張を押し通す。政治的なプロセスを踏むことによって、子どもたちが手にする教科書の内容を歪めようとする姿勢に、恐怖すら覚えた。

それと同時に、歴史修正主義的な動きが想像以上に大きなものとなっていることに衝撃を受けた。それまでの自分は、歴史に対する偏った発信を「一部の者による過激な発

言」という程度にしか捉えていなかったのかもしれない。そうした軽い意識が、彼らが教科書にまで手を出すことを許してしまったのだろうか。インタビューに同行してから、「自由主義史観」を唱えるSNS等での発言を、一層注意深く見るようになった。

また、印象的だったのは「現役の教員は忙しすぎて、教科書をめぐる問題に関わるができないのでは」という土志田さんの言葉である。確かに、現場にいる教員たちは毎日多くの業務に押しつぶされそうになっている。しかし、かつての土志田さんがそうであったように、教育の変化に違和感や危機感をもつ教員は少なからずいるはずである。

なぜ彼らは声をあげないのか。あるいは、あげられないのかもしれない。「教育は中立であるべきだ」という過度な認識が、教師が自ら声をあげることを妨害し、歪んだ歴史教育を助長しているのではないだろうか。そのようなことを考えたりもした。

教育は、国家を大きく変え得る力をもっている。戦後と呼ばれる時代が長く続き、「戦争」が遠い存在となってしまっている今、「つくる会」の思想や行動が何をもたらすのかを、大人である私たちが本気で考えなければならないだろう。